

保育所長の生活困難家庭に対する支援の必要性の認識とその形成プロセス
－施設長へのインタビューを通して－

Necessity of Support for Families with Difficulties in Childcare:
Formation Process Analysis through Interviews with Nursery School Directors

鶴 宏史，中谷 奈津子，木曾 陽子
吉田 直哉，関川 芳孝

TSURU, Hirofumi NAKATANI, Natsuko KISO, Yoko
YOSHIDA, Naoya SEKIKAWA, Yoshitaka

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第9号 2024年

【原著論文】

保育所長の生活困難家庭に対する支援の必要性の認識とその形成プロセス
ー施設長へのインタビューを通してー

Necessity of Support for Families with Difficulties in Childcare:
Formation Process Analysis through Interviews with Nursery School Directors

鶴 宏史* 中谷 奈津子** 木曾 陽子***
吉田 直哉*** 関川 芳孝****

TSURU, Hirofumi* NAKATANI, Natsuko** KISO, Yoko***
YOSHIDA, Naoya*** SEKIKAWA, Yoshitaka****

要旨

本研究の目的は、保育所等における生活困難家庭への支援に関して、管理職の有する理念や価値がどのように形成されたか、そのプロセスと影響要因を検討することである。大阪府内の保育所長等にインタビューを実施し、生活困難家庭への支援に対する法人等の組織理念の有無と内容、支援の必要性に対する園長自身の考えやそこに至ったプロセス等に該当する箇所を、質的データ分析法を参考に分析した。結果、8個のカテゴリーと15個のサブカテゴリーが生成された。園長の支援の必要性は、園長が家庭支援の有効性に気づき、失敗をしつつもそこから学び親子の最善を模索しながら自らの実践に納得するプロセスから形成されており、そこには生活困難家庭に対する職場全体・園長等の管理職・同僚の支援観や姿勢、生活困難家庭にどれだけ関わったか、職場のある地域の性質等が影響していた。今後の課題として、複数の保育所等のデータを合わせて分析を行うことが挙げられた。

キーワード：生活困難家庭 子ども家庭支援 保育所 認定こども園 管理職

1. 研究の背景と研究目的

本研究でいう「生活困難」とは、子どものしつけや育児不安、児童虐待に関することだけでなく、介護、疾病や障害、夫婦関係、ドメスティック・バイオレンス（DV）、不登校、ひきこもり、経済的困難、外国籍から生じる問題等、家庭内で起こり得る様々な困難を意味する。生活困難を抱えた家庭は、不適切な養育に陥りやすい傾向にあるため、保育所や認定こども園（以下、「保育所等」と表記）においては問題の早期発見と適切な介入や支援が求められる。

筆者らはこれまで、生活困難を抱える家庭への支援について先駆的に取り組んでいる保育所等へのインタビューをもとに、保育所等における生活困難家庭へのよりよい支援の方策について検討してきた^{(1)~(9)}。しかし、生活困難家庭を含む特別な配慮を必要とする家庭への支援は、保育所保育指針等においては努力義務とされ、各保育所等や保育者によってその必要性の認識に大きな開きがみられる。そのため狭義の保育や子育てで支援を超えた、生活困難家庭への支援を保育所等の役割として位置づけ実践することは、新たな理念を当該園に付与し、園内の保育者たちの意識を変え、体制を構築していくプロセスともいえる。適切な時機に適切な支援を展開するためには、園長等管理職が中心となり、家庭支援に対する保育所等の理念を掲げ、そのための体制を構築し、保育者一人一人にその理念の意義を浸透させ、子どもや家庭への具体的な支援に日々反映させることができるようにしていかなければならない。

* 教育学科教授 ** 神戸大学大学院准教授 *** 大阪公立大学大学院准教授
**** 元・大阪公立大学大学院教授

では、そのような新たな組織の理念について、園長等の管理職はどのようにそれを組織に浸透させ、実践に結びつけているのか。そこで本研究では、生活困難家庭への支援に先駆的に取り組む保育所等への聞き取りをもとに、生活困難家庭への支援に関して、管理職の有する理念や価値がどのように形成されてきたか、そのプロセスと影響要因について検討することを目的とする。

2. 保育者の実践に関する意識変容

生活困難家庭への支援の必要性を認識しそれに関する理念を有することは、キャリアを積み重ねるなかでその必要性を有していった意識変容ともいえる。

保育者の実践に関する意識変容に関して、三好は、保育者主導の保育から子ども主体の保育に意識変容した実践を報告している⁽¹⁰⁾。ある保育園の約2年間の園内研修において、筆者が実践に関わりながら保育者の意識の変容と保育内容の変化を観る参与観察を行った結果、園内研修を通して保育者は、「子どもの活動の成果」や「保育者の言葉がけにどのように反応するか」という意識から、子どもの「声を聴く、興味・関心に寄り添う、共に考える」と子どもの側から保育を捉え直す意識へと変わった。そのことを通して、保育内容も「保育者主導」から「子ども主体」へと変化が見られたことを明らかにしている。この意識変容の要因として、保育参観、カンファレンス、成果と課題の可視化、チェンジエージェントの視点の取り入れ、保育者の気付き・意欲・同僚性に働きかけた点が挙げられた。

また、堀らは、近年増加傾向にある外国籍幼児の支援に関する実践的研究を行っている⁽¹¹⁾。外国籍の幼児は、母語しか話せない場合がほとんどであり、制度としても支援が不十分である。そのため、保育における意思疎通の難しさが問題となるため、コミュニケーションの広がりを目指した保育の構築が求められる。その際に、これまでの保育方法や支援ではうまくいかない時に、カンファレンスや省察を通して保育方法や支援を変化させるという保育者の意識変容の重要性を指摘している。

濱名は、複数担任クラスにおける新任保育者の子どもとのかかわりに関する意識変容を、当事者の視点から以下のように示している⁽¹²⁾。すなわち、新任保育者の意識は「子どもの気持ちを重視する意識」と「保育者の意図を重視する意識」の間で揺れ動きながら変容し、それらの意識は①発達段階がわからず戸惑い期、②アドバイス通りにできない焦り期、③自身のかかわりで子どもが動くことが手ごたえ期、④子どもとのかかわり方に対する考えの転換期、⑤様々な視点から子どもとのかかわりを考え始める期を経て変容していたことが明らかになった。新任保育者が悩んだり、葛藤したりした時にそのような悩みや葛藤が生じる契機として先輩保育者からの助言があった。助言は、新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識を修正させる反面、焦りを生じさせると指摘している。一方で、子どもの反応や先輩保育者からの褒めは、新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識を強化させる働きがあると考えられる。また、新任保育者の意識変容においては成功体験だけでなく自身が保育で「できないこと」を受け入れる経験も重要であることも指摘している。

境は、固定遊具を有する園庭での保育から、それらの全てを廃した森の自然環境を活用した保育への転換を経験した園の保育者の語りを分析し、保育者の意識変容や葛藤を明らかにした⁽¹³⁾。グループインタビューの結果、多くの保育者に共通する意識変容のプロセスとして、あるべきものが「ない環境」から、子どもや保育にとって必要なものが「ある環境」へというプロセスが明らかとなった。自然保育の経験が少ない保育者は、転換当初、固定遊具の機能を補填できるかと

いう不安を経験するが、子どもと併走して森での遊びや生活を開拓していくなかで、自然環境は、固定遊具の機能を代替できるほか、子どもの想像力や感性の繁用を助長し、遊びや文化の協働構成を促進し得るという認識を形成していた、と指摘する。

これらの研究は短期スパンでの意識変容であるが、意識変容は別の視点からはキャリア形成や職能成長からも捉えることができるだろう。足立と柴崎は、保育者がどのような問題や揺らぎの中で、保育者アイデンティティを形成するかを調査している⁽¹⁴⁾。その際、保育者の成長過程を参考にし、保育経験年数を、①新人期（満0年）、②新任期（満1年から満2年）、③中堅前期（満3年から満5年）、④中堅後期（満6年から満15年）、⑤熟練前期（満16年から満25年）、⑥熟練後期（満26年以上）に分類した。インタビューの結果、保育者にはその成長に応じた様々な問題や落ち込み、揺らぎがあることが明らかになると同時に、それらの解決のためには相談できる重要な他者の存在、すなわち、信頼できる上司や同僚の存在やメンタリングシステム等の新人養成システム、スーパーバイザーの存在や勤務体制等といった保育者を取り巻く職場環境が大きく関与していることが明らかになった。

本研究の目的は前述のように、生活困難家庭への支援に関する管理職の理念や価値の形成プロセスやその影響要因の検討であるが、これらの意識変容やキャリア形成の視点も踏まえて検討を行う。

3. 研究方法

(1) 調査の概要

生活困難家庭を積極的に支援する保育所等を対象とし、保育所等の管理職である園長に対し半構造化面接法を用いたインタビュー調査を行った。調査対象とした保育所等は、2020年に筆者らがインタビュー調査を行った保育所等の中でも特に積極的に生活困難家庭への支援を実施していると判断された園及び書籍や実践報告等で、生活困難家庭への支援について発信している5施設を抽出し、調査の依頼を行った⁽¹⁵⁾。

質問項目は、生活困難家庭への支援に対する法人や保育所等の組織理念の有無と内容、支援の必要性に対する園長自身の考えやその考えに至ったプロセスやきっかけ等、支援に対する保育者の考え、園内の連携・協働体制、生活困難家庭への支援の必要性を伝えるにあたっての課題である。調査期間は2022年7月～8月である。

そして、本研究では園長が生活困難家庭への支援の必要性を認識し、園長自身の生活困難家庭に対する考えやその形成プロセスを、特に詳細に語っていた一つの保育所のデータを用いて分析を行う。この園長を対象とした理由は、当該施設で勤務し続けて主任等を経て園長になった点、園長として10年以上の経験を有している点である。

(2) 倫理的配慮

調査実施前に依頼文、研究計画書を送付し、研究の趣旨、目的、個人情報扱い等について事前に周知した。調査開始前にも説明し、研究協力に関する同意を得た。データの録音及び保管について調査協力者に説明し承諾を得た上でICレコーダーに録音した。調査実施にあたっては、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会で承認を得ている。

(3) 分析方法

本研究では、園長の生活困難家庭への支援の必要性に関する認識とその形成プロセスを明らかにするために、質的データ分析法⁽¹⁶⁾を参考に分析を行った。分析の手順は、以下の通りである。なお、②～⑦の手順は第一筆者と第二筆者で行い、その後、全員で確認し修正を行った。

- ①IC レコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成した。
- ②インタビューの逐語録を読み、逐語録から、園長の生活困難家庭を支援する際の過去、現在の考え方やそれに影響を与えたことに関する語り（文書セグメント）を抽出した。
- ③それぞれの文書セグメントを比較し一致したものは採用し、一致しないものは話し合ってから採用するか否かを決定した。
- ④文書セグメントの内容を単純に要約し、オープンコードをつける作業を行った（表1の焦点コード）。
- ⑤そのオープンコードを内容の類似性に基づき分類し、より抽象度の高いコードを創出し選択的に割り振った。
- ⑥文書セグメントとコード間、複数のコード間を比較検討し、抽象度の高いカテゴリーを生成した。
- ⑦カテゴリーの相互関連を視覚的に表示するために図を作成し検討を行った。

4. 結果

分析の結果、表1の通り、8個のカテゴリー（以下、＜ ＞）と15個のサブカテゴリー（以下、『 』）が生成された。なお、表1の焦点コードは「3. 分析方法」の④の手続きによるものである。以下では、適宜語り（イタリック体、もしくは「 」）を引用しながら、分析結果について説明する。なお、イタリック体内の（ ）は筆者の補足である。

(1) 分析結果の全体像

生活困難家庭への支援に関する園長の有する理念や価値、それらが形成されたプロセスと影響要因についての全体のストーリーラインは以下の通りである（図1参照）。

園長は、新人期に＜就職当時の支援観＞に基づいて保育や保護者対応を行うが、新任期から中堅期にかけて経験を重ねる中で＜家庭支援の有効性への気づき＞により生活困難家庭の実態や支援の必要性を認識する。しかし、中堅期の後期に入り同僚や外部専門職とのやり取りの中で＜保護者のニーズが欠落した家庭支援＞に陥り悩む。

その後、＜うまくいかなかった実践からの学び＞を経て＜手探りで親子の最善の模索＞を行うことで、＜自分の実践への肯定＞を実感し、＜現在の園長の支援観＞に至る。こうした一連のプロセスには＜保育実践の中で引き出され育てられる支援観＞が常に影響している。

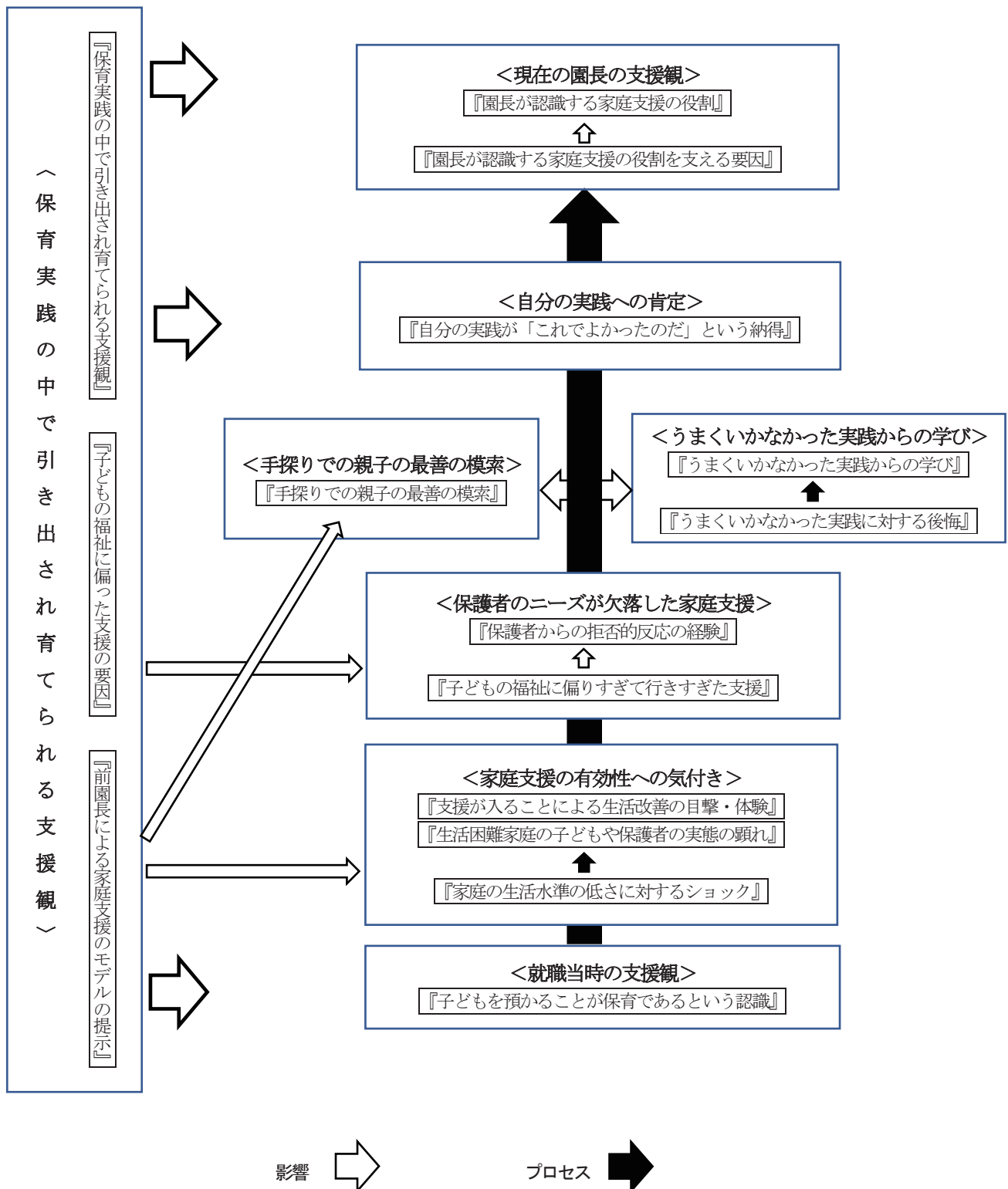
(2) 園長が生活困難家庭への支援を必要と考えるに至ったプロセス

1) 生活困難家庭への支援の必要性や有効性に気付くまで

園長の新人期の＜就職当時の支援観＞は、「目の前の子どもたちと関わることが保育だと思っていたと思いますね」という『子どもを預かることが保育であるという認識』で子どもや保護者と関わり、生活困難家庭への支援のみならず家庭への支援そのものに関する意識はほとんどなかった。

表1 園長の生活困難家庭支援の必要性の認識プロセスと影響を構成するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	焦点コード
就職当時の支援観	子どもを預かることが保育であるという認識	目の前の子どもを預かることが保育であるという認識
家庭支援の有効性への気付き	家庭の生活水準の低さに対するショック	子育て家庭の生活水準の低さに対するショック
		子どもの姿から家庭の生活困難の背景を推測する
		生活困難家庭の多い地域特性に触れる
		経験のないことによる子どもの発達への負の連鎖
		他者への不信に起因する援助希求の乏しさ
		生活経験の不足により解決方法の分からない保護者の姿
		自分たちは公的支援が受けられないという保護者の思い込み
		複雑に絡み合った困難から「当たり前でない」ことを知る
	支援が入ることによる生活改善の目撃・体験	支援が入ることによる生活改善を目の当たりにする 生活改善による親の潜在力の発揮
保護者のニーズが欠落した家庭支援	保護者からの拒否の反応の経験	寄り添ってもらえないことに対する保護者の違和感 園の支援に対する保護者の拒否的な反応
		子どもの福祉に偏りすぎて行きすぎた支援
	子どもの福祉に偏りすぎて行きすぎた支援	子どもの福祉を守るための親役割への過剰な期待 子どもの福祉に偏りすぎた保護者のしんどさを考慮しない支援方針 保護者の状況に寄り添わない行きすぎた支援
		保護者のしんどさに気付かなかったことへの後悔
うまくいかなかった実践からの学び	うまくいかなかった実践に対する後悔	
	うまくいかなかった実践からの学び	自分のこれまでのうまくいかなかった実践から学ぶ 保護者の受身的態度から主体的態度への変容の必要性 保護者が安心して自分のしんどさを話せるようになるには時間がかかることが分かる
手探りでの親子の最善の模索	関係構築を試みながらの手探りでの親子の最善の模索	親子の最善を手探りで模索する 困った時は頼ってもいいと思ってもらえる関係性の構築
自分の実践への肯定	自分の実践が「これでよかったのだ」という納得	自分のこれまでの実践に「これでよかったのだ」と納得する 手探りの支援プロセスの中で保護者の状況が不意に分かる
現在の園長の支援観	園長が認識する家庭支援の役割	子どもが現在を最もよく生きることを保障する 園の役割は困っている親子に対して何かをすることである 必要と思われる支援は何でもする 園には保護者のしんどさや助けてほしい気持ちを引き出す役割がある 他機関を仲介することによる家庭支援
	園長が認識する家庭支援の役割を支える要因	支援の判断の拠り所としての理念の存在 子どもを通して家庭を見て地域を見る それぞれの家庭の問題をパターン化せず独自の問題として捉えることの重要性 家庭支援を通して高まる自己尊重の気持ち 必要に応じて法人の理念を参照する
保育実践の中で引き出され育てられる支援観	保育実践の中で引き出され育てられる支援観	現場に参画することで引き出され育てられる支援観 子どもの存在に支えられる支援観 園内の生活困難家庭に対する濃密な実践
	前園長による家庭支援のモデルの提示	前園長による人間を信頼する信念の提示 子どもの保育という従来の認識を超えた前園長による家庭支援
	子どもの福祉に偏った支援の要因	表面的な関わりによる本音の言いにくさ 子どもの福祉に偏りすぎた支援による保護者理解の欠如 担任からの圧力による支援方針のゆらぎ



しかし、新任期から中堅期にかけて＜家庭支援の有効性への気付き＞により生活困難家庭の実態を知り、支援の必要性を認識する。まず、日々親子と関わる中でうっすらと親子の実態がみえてきて、『家庭の生活水準の低さによるショック』を受ける。

- ・僕自身が実際にこの町に対しての偏見を持ちながら入ったところがある。
- ・この保育園に来て、そのときに家庭背景が全然違うなということにすごくギャップを感じたというか、△△（前に勤務していた園のある地域）でのSランクが、ここではCランクというか、日常当たり前でというところ。

親子の実態にショックを受けつつ、生活困難家庭と関わり続ける中で『生活困難家庭の子どもや保護者の実態の顕れ』によって生活困難家庭への支援の必要性を感じ、『支援が入ることによる生活改善の目撃・体験』を通して家庭支援の有効性に気付く。

『生活困難家庭の子どもや保護者の実態の顕れ』とは、親子の背景、すなわち親子の生活困難の実態やなぜそのような状況に陥っているのかを理解できるようになることである。

- ・しんどい人が集まってきているだけであって、決してさばっているわけではないし、一生懸命生活はするんだけど、そのすべを知らなかったり、経験できていなかったりという人たちがすごく多いんだろうなということに気付かされるというか。
- ・よくよく考えると子どもらは外に出る経験がないので、当然ながら、保育園に来たら、体力がないから体調を崩してしまう。保護者の方が保険証を持っているかということ、保険証がない。医療にも関われないし、市販の薬もやはり高いから、そういった意味で保育園に行かせたくない。

『支援が入ることによる生活改善の目撃・体験』とは、園長が他の職員の生活困難家庭への支援による親子の生活困難の改善を見たり、園長自身の支援による親子の生活困難の解決を経験したりしたことある。

- ・やはり生活が一変したんです。もう自分たちで送迎できるようになりますし、生活保護のほうから「6畳一間で4人なんてあり得ないから、もう転居してください」ということで転居指導が入って、広いうちに住むことができるようになり、なおかつ、たまたま洗濯機も手に入れることができるようになって、当然ながら洗濯もできるようになるというか。
- ・連絡帳で「やっとお母さんらしくなれました。今の悩みは子育てです」みたいなことを聞いた瞬間に、「ああ、こういうことなのかな」みたいな。

2) 生活困難家庭への支援が行き詰まる時期

＜家庭支援の有効性の気付き＞によって生活困難家庭の生活改善を意図するようになるが、子どもを思うがゆえに『子どもの福祉に偏りすぎた支援』に陥る。『子どもの福祉に偏りすぎた支援』とは、園長を含めた職員や関係者が子どもの生活や成長を優先するあまり、親の気持ちを配慮しなかったり、親に過剰に親としての役割を押し付けたりする対応を行うことである。

- ・別のケースでは圧がありすぎて、お母さんをフォローしているつもりなんだけれども、結果的に、子どもは少しずつ登園は増えてきたんだけど、転居してしまうみたいなケースがあったんですね。そこはやはり自分たちの気持ちが強くなりすぎているというか、「お母さん、こうなってほしい」みたいなところが強く出過ぎてしまう。

- ・なかなかそこ（母親のしんどさを聞くということ）には行き着かない。やろうとはするんだけど、でも、どちらかというと、もうこっち（子どもの権利）が強くなりすぎているから、聞き出すとか、そういう方向になっていたんじゃないかなとは思いますがね。

『子どもの福祉に偏りすぎた支援』によって、保護者との関わりの中で違和感を感じたり、拒否的な態度をとられたりといった『保護者からの拒否的反応の経験』に遭遇する。

- ・送迎しようと思っても、「体調が悪くなるから」とかいろいろな理由をつけながら、それをだんだんと拒まれるというか……。支援をしながらどう関わっていったらいいのかなみたいなところで、「なかなか洗濯物とかも追いつかなくて」とか。「洗濯物か。そこをやることによって保育園に来れるのかな」というところで実際に洗濯支援とかもやりながら、でも、その保護者はお昼間歩き回っている姿も見る。

このようなく保護者のニーズが欠落した家庭支援に陥り、園長が意図する生活困難家庭への支援がうまくいかなくなる事態に遭遇する。

3) 失敗から学び、親子にとっての最善の支援を模索する時期

＜保護者のニーズが欠落した家庭支援＞によって、保護者に拒否的な態度をとられる等、信頼関係の構築ができずに生活困難家庭への支援がうまくいかないことを経験し、＜うまくいかなかった実践から学び＞につながる。これは、『うまくいかなかった実践に対する後悔』から『うまくいかなかった実践から学び』へと至る。

『うまくいかなかった実践に対する後悔』は、子どもを優先するあまり保護者のしんどさに気付かず、保護者の気持ちや状況に寄り添えなかったことに対する後悔である。

- ・お母さん自身の本当にしんどい部分って何だったんだろうなって。後から考えると、お母さん自身が本当の気持ちを吐露というか話せる空間というのが、きっと全くなかったんだろうなと。

『うまくいかなかった実践から学び』は、子どもを優先させるあまり保護者にとっては支援がマイナスになっていたことの気づきや保護者の主体性の尊重の重要性の気づき、保護者自身のしんどさを保育者に話すようになるには時間がかかることの気づきが挙げられた。

- ・子どもの権利は守ってきたかもしれないけれども、根本的に家庭を見ると、やはりマイナスになっていたんだろうなというところが先ほどの例とは本当に反対で、そこが自分としての大きな学びだなというか。
- ・本当にそこ（母親が自分のしんどさを話す）は時間を掛けていくしかないのかなと。お母さんのペースというところを大事にしていくことが必要なかなとは思いますが。

＜うまくいかなかった実践から学び＞ながら、生活困難家庭の子どもにも保護者にもどのような支援が最適なのかという＜手探りで親子の最善の模索＞を繰り返すようになる。そこでは、『関係構築を試みながらの手探りで親子の最善の模索』のように保護者との関係を意識して支援を考えていた。

- ・そこはゆっくりと話をする中で、そのしんどさをいかに気持ちよく吐き出してもらおうかと

いうか、「ここに困っているんだ」ということを安心して言ってもらえるような関係性がそこには共通項としてあるのかなということ、いろいろなケースを通じて学ばされたというところがあるかなと。

4) 自らの実践の肯定から現在の支援観へ

＜うまくいかなかった学び＞や＜手探りで親子の最善の模索＞を繰り返しながら、生活困難家庭の困難解決のケースを積み重ねることで『自分の実践が「これでよかったのだ」という納得』をするという＜自分の実践への肯定＞を経て、＜現在の園長の支援観＞に至ると考えられた。

『自分の実践が「これでよかったのだ」という納得』は、これまでの経験や学びを踏まえて保護者の状況やつらさを理解し、保護者に寄り添えるようになるとともに、どのような支援が生活困難家庭にとってよいのか分かるようになり、園長自身の実践のあり方に納得することである。

- ・「これ（家庭への支援）、やるべきか、ほんとに」というところを続けてきた中でポロッと出てきた家庭的な、経済的な問題があるということが分かり。
- ・関わりとしては、2回目の事例（失敗事例）ではなくて、やはり1回目の事例（成功事例）みたいな関わりをやっていくことが必要なんだろうなとすごく感じた2つの事例だった。

＜現在の園長の支援観＞は、これまでの経験・学びや『園長が認識する家庭支援の役割を支える要因』に支えられた『園長が認識する家庭支援の役割』から構成される。

『園長が認識する家庭支援の役割』は、生活困難家庭における支援として、園は子どもが現在を最もよく生きることを保障するとともに、保護者のしんどさを引き出し困っている親子に対して必要な支援は他機関との仲介を含めて、できることは何でも行う役割を果たすというものである。

- ・そういった *SOS* が出せないところの気持ちをどれだけ引き出せるかというか、聞ける相手になっていくかということによって、このご家庭がひょっとしたら変われるチャンスというか、変わりたいんだけども変わられないという、そこに何かできるというのは、保育園として一つやれることなのかな、これが大きな役割なんじゃないかな。
- ・必要だったら（支援は何でも）やるかなと思いますしね。

『園長が認識する家庭支援の役割を支える要因』は、上記の『園長が認識する家庭支援の役割』に直接的に影響している要素である。これには、園長の所属する社会福祉法人の理念の存在やそれらを適宜参照すること、親子を通して地域を捉える視点、生活困難家庭の個別化等が挙げられた。

- ・例えば支援するべきなのか、それとも依存なのかみたいなどの部分で立ち返ってこれるところがやはり（法人の）理念。
- ・この人の困り事はこれだなというふうに勝手に当てはめたら駄目だなと。

(3) 園長の支援観に影響を与える要因

園長の生活困難家庭への支援に対する考え方とそこに至るプロセスにおいて、＜保育実践の中で引き出され育てられる支援観＞が影響していた。

『保育実践の中で引き出され育てられる支援観』は、「現場に入って育て上げられた」や「本当

に出会いに助けられたというか、そこで自分の気持ちを「変える」ではないですけど、あったものを引き出された」、 「実際の子どもの支えがあり」の語りにあるように、 現在勤務する園での様々な実践や親子との出会いが、 生活困難家庭に対する支援の必要性の認識に影響を与えていた。 それに加えて、 自分が直接対象となる親子と関わらなくても情報共有、 ケース会議、 ケースの見聞きといった間接的な関わりも影響を与えていた。

- ・（自分は直接親子を担当していないがその事例について一緒に見聞きして園として） どういうふうにしていったらいいんだろうな、 みたいなどころではありましたけどね。
- ・ 当時はケース検討会というのはなかったんですが、 必要なときにはケース会議ということ で園長、 主任とクラスぐらいはやっているところでしたね。

また、『前園長による家庭支援のモデルの提示』によって、 新人期の『子どもを預かることが保育であるという認識』の転換に大きく影響を与えたり、 保護者を信じる姿勢の形成にも作用したりしていることが示唆された。 それは生活困難家庭の支援のために園長の認識を超えた支援を行う前園長の姿であったり、 保護者を信頼することはどういうことかを示す前園長の姿であったりした。

- ・そこ（生活保護につなげる） まだが保育園の仕事とは思っていなかった部分もありましたし、 たぶん生活保護に園長が行ったというところも、 「え、 そこまでやるんや」 って思った 感覚はあったんですけども。
- ・（保護者の依存につながる支援ではないかと迷いつつもその支援を行う理由は、 保護者を） 信じるというところですかね。「その人を信じて、 だますよりだまされるでいいやん。 そう いう気持ちで関わるほうがいいんちがう？」 というのは前の園長から言われましたね。

<保護者のニーズが欠落した家庭支援>に強く影響を与えていたのは、『子どもの福祉に偏った支援の要因』であった。 これは、 園長をはじめとする職員が、 子どもを思うがゆえの保護者の 思いや状況を置き去りにした支援の原因である。 その原因には3つが挙げられ、 担任からの「子どものために」という圧力による支援方針のゆらぎ、 子どもを思うがゆえの保護者理解の欠如、 保護者との表面的な関わりであった。

- ・お母さん自身の困り事は結局分からずじまいで、 子どもにとっての良かれであり、 お母さんにとっての良かれというところはどこにもなかったんだろうなというのを学ばされた。
- ・やはりクラスの思いが強すぎるというか、「児相にちゃんと言ってくれなかったんですか」とか、 やることの領域を超えるような要求が出てくるというか、 そういう時代があったな と思いますね。

5. 考察と今後の課題

本研究では、 生活困難家庭への支援に先駆的に取り組む保育所等の園長へのインタビューをもとに、 生活困難家庭への支援に関して、 園長の有する理念や価値がどのように形成されてきたか、 そのプロセスと影響要因について検討することを目的に分析を行った。 結果、 園長の生活困難家庭に対する支援の必要性の認識と支援観は、 生活困難家庭に対する職場全体・園長等の管理職・同僚の支援観や姿勢、 生活困難家庭にどれだけ関わったか、 職場のある地域の性質等が影響し、 園長が家庭支援の有効性に気付き、 失敗をしつつもそこから学び親子の最善を模索しながら自ら

の実践に納得するプロセスから形成されていると考えられた。

新入期・新任期にかけて、＜就職当時の支援観＞が＜家庭支援の有効性への気付き＞に変容していることが示された。分析の結果、そこでは当時の園長自身にも生活困難家庭との絶え間ない関わりがあり、他の職員の実践を目の当たりにし、園内のケース会議に参加すること等も行われていることがわかった。境は、保育経験の少ない保育者が自分の経験のない保育方法に不安を感じつつも実践を繰り返す中で、新たな保育方法を理解し意識が変容していくことを示唆している⁽¹⁷⁾。また、三好は、保育者の意識変容の要因として、保育参観、カンファレンス、成果と課題の可視化、チェンジエージェントの視点の取り入れを指摘している⁽¹⁸⁾。本研究においても、これらの意識変容の要因と同様のことが指摘された。つまり、日々の実践の繰り返し、成果と課題の可視化、会議による情報共有や視点の取り入れ等は、生活困難家庭への支援の必要性の認識にも有効に機能するものと考えられた。

また中堅期においては、＜保護者のニーズが欠落した家庭支援＞に直面し、悩みながらも、＜うまくいかなかった実践からの学び＞や＜手探りで親子の最善の模索＞を経て、＜自分の実践への肯定＞を実感していることが示された。堀らは、省察を通して保育者の意識変容（保育方法の変化）が促されていくことを指摘しているが⁽¹⁹⁾、＜うまくいかなかった実践からの学び＞や＜手探りで親子の最善の模索＞は、当時の園長やその他の保育者たちによる日々の省察の営みであるともとらえられる。常に実践を振り返り、最善を模索する中で、当時の園長らの実践は、＜保護者のニーズが欠落した家庭支援＞よりも、親子の最善を考慮した家庭支援へと変化していることがみられているが、この背景には、園長をはじめとした保育者たちの省察を通しての意識変容がうかがえる。また、生活困難家庭への支援の際には信頼関係の構築が困難な場合が多いが、何とか支援につなげようと考えながら継続的に関わることで⁽²⁰⁾、保育者自身が様々なことに少しずつ気付き、見えてくることが示唆されており、その繰り返しが信頼関係につながっていくと考えられた。

さらに、足立と柴崎は、保育者の成長に応じた悩みの解決の要素の一つに、信頼できる上司を挙げているが⁽²¹⁾、本節でも『前園長による家庭支援のモデルの提示』のように前園長の存在の重要性が示された。社会福祉法人等では、その核となる保育者が次代に向けて法人理念を引き継いでいくことが予想されるが、前園長等によるモデルの存在が、それぞれの保育者の意識を変容させ、次の世代に理念を引き継ぐ媒介者となっていくものと思われた。現在の園長の支援観には、豊かな実践の蓄積と絶え間ない省察、職員間での情報共有や視点の取り入れ、信頼できるモデルの存在等もまた影響しているものと考えられた。

とはいえ、異なる保育所等の管理職では、このプロセスや影響要因が異なっている可能性がある。そのため、複数の保育所等のデータを合わせて、さらに分析を進めることが今後の課題である。

注・引用文献

- (1) 中谷奈津子「生活困難家庭の早期発見に関する保育者の敏感さと他機関連携—様々な気づきが事務室に集約される園に着目して—」『子ども家庭福祉学』(20)、2020、27-39.
- (2) 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝「生活困難家庭を支援する保育所等の組織特性—支援の必要性の認識と園長のリーダーシップを視野に—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』13 (2)、2020、29-37.
- (3) 中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝「子ども家庭支援における園内の情報共有—様々な気づきが事務室に集約される園に着目して—」『学校教育センター紀要』(7)、2022、35-47.

- (4) 中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝「子ども家庭支援に関する保育者間の情報共有とその戦略—生活困難家庭の早期発見から他機関連携に至るプロセスに着目して—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』15 (2), 2022, 27-38.
- (5) 中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝「子ども家庭支援に関する情報共有を支える組織的要因—生活困難家庭を積極的に支援する保育所等へのインタビュー調査から—」『社会福祉学』63 (3), 2022, 41-54.
- (6) 木曾陽子・中谷奈津子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝「保育所等における生活困難家庭支援のための介入プロセス—積極的に支援を行う園に対するインタビュー調査より—」『保育学研究』60 (2), 2022, 103-115.
- (7) 木曾陽子・中谷奈津子・吉田直哉・関川芳孝・鶴宏史「保育所等における生活困難を抱える家庭との連携—子どもへの積極的支援を行う保育所等へのインタビュー調査から—」『社会問題研究』72, 2023, 1-14.
- (8) 吉田直哉・中谷奈津子・木曾陽子・鶴宏史・関川芳孝「管理職によって抱かれる子ども家庭支援を支えるポリシー—認定こども園でのインタビューにおける語りから—」『社会問題研究』72, 2023, 72-91.
- (9) 鶴宏史・中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・関川芳孝「保育所・認定こども園での生活困難家庭への支援における保育者の姿勢—保育者へのインタビューの分析を通して—」『学校教育センター紀要』(8), 2023, 57-70.
- (10) 三好年江「保育者の意識変容と保育内容の改善を目指した園内研修—気づき・意欲・同僚性に注目して—」『新見公立大学紀要』(37), 2016, 107-114.
- (11) 堀奈美・松本信吾・七木田敦・清水寿代・河口麻希・菅村亨・中邑恵子・小鴨治鈴「多文化共生社会における外国籍幼児の支援に関する実践的研究—コミュニケーションの広がりを目指した保育の構築—」『学部・附属学校共同研究紀要』(45), 2017, 21-31.
- (12) 濱名潔「複数担任クラスにおける新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識変容プロセス—オートエスノグラフィーによる日記の分析—」『国際幼児教育研究』(27), 2020, 55-72.
- (13) 境愛一郎「自然環境を活用した保育への転換に伴う保育者の意識変容と葛藤—固定遊具から森へ—」『宮城学院女子大学発達科学研究』(19), 2019, 25-36.
- (14) 足立里美・柴崎正行「保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討」『保育学研究』48 (2), 2010, 213-224.
- (15) 2020 年の調査では、大阪府社会福祉協議会（以下、府社協）に、過去に生活困難家庭への支援を行った経験があり、積極的に支援を実施していると思われる保育所等の選定を依頼し、調査協力の承諾を得た 9 園を調査対象園とした。府社協に依頼したのは、府社協保育部会が長年地域貢献支援員（通称：スマイルサポーター）の養成研修を実施し、複合的な課題を抱える世帯のワンストップ相談・支援に取り組んでいるからである。
- (16) 佐藤郁哉『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社, 2008.
- (17) 境愛一郎, 前掲論文, 2019.
- (18) 三好年江, 前掲論文, 2016.
- (19) 堀奈美・松本信吾・七木田敦・清水寿代・河口麻希・菅村亨・中邑恵子・小鴨治鈴, 前掲論文, 2017.
- (20) 鶴らは、生活困難家庭への支援の保育者の姿勢の一つの姿勢として、「つながり維持のための努力」という、親子との関係を維持するために、また、親子と関係が切れないように日頃から保護者にこまめに関わる姿勢を保っていることを明らかにしている（鶴宏史・中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・関川芳孝, 前掲論文, 2023）。
- (21) 足立里美・柴崎正行, 前掲論文, 2010.

参考文献

- (1) 浅井かおり・浅井拓久也「保育者のキャリア形成の過程に関する研究（3）－保育士から幼稚園教諭，幼稚園教諭から保育士への転職理由の比較－」『東京未来大学研究紀要』（17），2023，1-11.
- (2) 衛藤真規『保護者との関係構築に関する保育者の語りの検討－保育者の専門的成長の観点から－』風間書房，2021.
- (3) 濱名潔「ストレートマスターの保育者はどのようにキャリアを形成するのか－キャリア形成における困難に着目して－」『保育学研究』59（3），2021，49-61.
- (4) 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝編著『保育所・認定こども園における生活課題を抱える保護者への支援－大阪府地域貢献支援員（スマイルサポーター）制度を題材に－』大阪公立大学共同出版会，2018.
- (5) 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝編著『保育所等の子ども家庭支援の実態と展望－困難家庭を支えるための組織的アプローチの提案－』中央法規，2021.
- (6) 野屋敷結・川田学「保育者としての成長とキャリア形成－『保育者を続けている理由』からの考察－」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（134），2019，91-116.
- (7) 岡田朱世「保育所保育士の職能成長の捉え方－現職保育士に対する質問紙調査の分析を通して－」『教育学研究論集』（11），2016，9-16.
- (8) 榊原剛・岩崎淳子・綾野鈴子「保育者のキャリア形成に関する一考察（2）－ミドルリーダーとしての成長と職員体制構造の関連に着目して－」『教育文化研究』（11），2022，27-43.
- (9) 榊原剛・岩崎淳子・綾野鈴子「保育者のキャリア形成に関する一考察－ミドルリーダーとしての意識と役割に係る要因に着目して－」『教育文化研究』（9），2021，31-44.
- (10) 坂田哲人・井上真理子「保育者の成長・動機付け要因に着目した職務満足度に関する研究」『大妻女子大学家政系研究紀要』（59），2023，41-46.
- (11) 高濱裕子『保育者としての成長プロセス』風間書房，2001.
- (12) 鶴宏史・中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・関川芳孝「保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援（5）園長による支援の必要性の認識とその形成プロセス」『日本保育学会第76回大会発表論文集』，2023，K-247-248.

【付記】

- ・本論文は，日本保育学会第76回大会（2023年5月14日，熊本学園大学，オンライン開催）の発表内容を大幅に加筆修正したものである。
- ・本論文は，科学研究費補助金（基盤研究B 研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築 課題番号：19H01651 研究代表者：中谷奈津子）の成果の一部である。